

序

ワイルドは、『ドリアン・グレイの肖像』の中で、芸術を道徳から超越させ、色彩や美や生の歓喜にこそ共感すべきである、と主張した。『サロメ』もまた、これらの主張の展開であり、ワイルド流の〈享楽主義〉の敷衍をそこに見ることができる。ペイターは真の享楽主義を、〈精神〉と〈肉体〉の調和した完全な発達であるとしたが、サロメの中には、両者の調和は見られない。

ここでは、『サロメ』におけるワイルドの芸術論を、その構成面からと、道徳面とから分析してみたい。

『サロメ』試論

木村 克彦

I 構成について

『サロメ』には、ワイルドの唯美主義の象徴的要素がちりばめられており、我々はいやがうえにも五官を刺激されずにはいられない。『ドリアン・グレイの肖像』でヘンリー卿は「感覚だけが魂を癒すことができる」と語ったが、『サロメ』において、そのいわば〈軸〉をなしているものはサロメの〈感覚〉なのである。このドラマは結尾において、クライマックスに到達するがサロメの感覚も、終幕へと向けて徐々に昂揚してくる。

まず最初は、聴覚的要素である。

What a strange voice! I would speak with him.

ひたすら官能の悦びを追い求める女の描出として〈聴覚〉のみの呈示である。サロメはヨカナーンの声に恋をしてしまう。次は視覚的要素だ。

The prophet comes out of the cistern. SALOMÉ looks at him and steps slowly back.

この後、サロメは 'I would look closer at him.' と繰り返す。しかし当然〈聴覚〉と〈視覚〉の刺激のみで満足はしない。

Let me touch thy body.

〈触覚〉的要素の登場である。サロメの肉欲は、更に激しく燃えあがる。

Let me kiss thy mouth.

そして彼女は、結尾において〈触覚〉的要素の満足を得る。

Ah! I have kissed thy mouth, Jokanaan, I have kissed thy mouth.

以上のように『サロメ』は劇の進行に伴って、王女の感覚も〈聴覚〉→〈視覚〉→〈触覚〉というように、段階的に呈示され高められていくのである。即ちプロットの盛り上がり、官能のそれとが、巧みに一致していると言えよう。

II 道徳的側面

劇中、登場以前にサロメは〈蒼ざめた美しい女〉という以外、殆んど予備知識は与えられていない。つまり何らの社会的、道徳的要素が与えられていないのだ。よって我々は、彼女の中に何ものにも縛られることのない、赤裸々な人間の本質を凝視することになる。これは、それらの拘束に対する、人間の本能のワイルド的な抗議ともとれよう。しかしサロメは、殺人という〈行き過ぎ〉を演じてしまった。

All excess, as well as all renunciation, brings its own punishment.

この言葉通り、ワイルドはサロメの〈行き過ぎ〉に〈死〉という 'punishment' を、プロットの上では与えたのである。しかしワイルドはサロメ王女に共感を寄せていなかったのではない。彼は『フローレンスの悲劇』のモチーフを次のように語ったそうだ。

Very few among us have the courage openly to set up our own standard of values and abide by it.

サロメの念頭に常にあった 'values' は何かといえば、それは実は〈愛〉に他ならなかったのである。サロメはヨカナーンを強烈に愛するが故に殺したのであり、このモチーフは『レディング牢獄の唄』でも語られている。サロメは自己の愛を貫き通すためには、全てを犠牲にしても悔いはない。あまつさえ自分の命でさえも。

...the mystery of love is greater than the mystery of death. Love only should one consider.

つまり『サロメ』はこのような愛と死のアンビバレンスの上に成立しているのである。また悲劇の主人公が常にそうであるように、サロメは自己の〈死〉を通じて、ある重要なものを成就したのだ。それは、自己の愛のみを見たもはや〈道徳〉などの入り込む余地のない〈純粹な形での愛〉であった。この存在し難いものへの希求が、ワイルドの最も主張したかったものではないだろうか。(駒沢大学大学院生)